

〔論文〕

スウェーデンの社会と博物館 I

— ストックホルムの東方博物館について —

Some Observations Concerning Swedish Society and Museums: I
— A Report on the Museum of Far Eastern Antiquities in Stockholm —

奥田 環
Tamaki OKUDA

Abstract

The Museum of Far Eastern Antiquities in Stockholm is so famous for its precious Asian collections that Japanese Archeologists and Orientalists value its bulletin as research data. However, the background and activities of this museum have not been introduced well to them.

In 1988 and 1989, the author had opportunities to visit the museum and held personal interviews with Mr. Per-Olow Leijon, who was a curator there. Materials about the museum were also collected then.

In this paper the outline of this museum is described first. Secondly its museum activities are compared with those of Japanese museums, and some remarkable characteristics are discussed considering the social atmosphere of Sweden, which is known as a welfare state where social guarantee and adult education are highly established.

はじめに

ストックホルムにある国立の東方博物館 Östasiatiska Museet, the Museum of Far Eastern Antiquities¹⁾ は、そのコレクションによって、日本でも考古学・東洋史研究者によく知られており、その紀要 *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities* は研究書として重用されているものである。しかし、当博物館がどのような背景を持ち、どのような活動をしているか、実状は意外と知られていない。

筆者は1988~89年に幾度か当館を訪れ、2回にわたり副館長・インテントであるレイヨン Per-Olow Leijon 氏に個人インタビューする機会を得た²⁾。本稿では、収集した資料とインタビューをもとに、まず東方博物館の全容を把握・紹介する。そして次に、高度の社会保障と成人教育の発達した福祉国家であるスウェーデンにおいて、博物館がどのような機能を果しているかを、日本の博物館の現状と比較しながら、考察してみたいと思う。

なお、本稿で扱うスウェーデン語の人名・職名は、全

て現地読みで発音し、それをカタカナで表現している。スウェーデン語名称の邦訳は全て筆者による。館の名称については、わかりやすさを期すため、スウェーデン語名称に次いで英語名称を載せるものとする³⁾。

また為替レートは、1SEK(スウェーデン・クローナ) = 約23円(1989年1月現在)である。

I 法的規定

スウェーデンには、日本の『博物館法』のような博物館に関する全般的な法律や、『博物館職員に関する規則』といったものは存在しない。国立の博物館・美術館は、政府の定める法令 Svensk författningssamling (SFS) によって個別に規定される。そこに勤める職員はみな国家公務員であり、その法令に職務その他の規定が述べられている。そこでまず東方博物館について、SFS の規定を見てみよう⁴⁾。

現在ストックホルムにおいて美術品を扱う館には、①国立美術館 Nationalmuseum, the National Museum of Art⁵⁾、②近代美術館 Moderna Museet, the Muse-

* おくだ たまき

連絡先 川村学園女子大学文学部史学科 〒270-11 千葉県我孫子市下ヶ戸1133 Tel. 0471-83-7113
Department of History, Kawamura Gakuen woman's University
1133 Sageto, Abiko-shi, Chiba 270-11 Japan Tel. 0471-83-7113 Fax. 0471-83-0115

um of Modern Art⁶⁾, ③東方博物館, の3館があり, それを行政的に総括する組織体を「国立美術館群 Statens Konstmuseer, the National Swedish Art Museums」と呼んでいる⁷⁾。この3館は距離的にも近く, 互いに密接な連携を保ちながら, 独自の活動をしている。

①は, 16～20世紀の絵画及び彫刻, スウェーデン人の作家やレンブラント・ルノワール・セザンヌなどの作品を展示し, ②は20世紀の美術としてマチス・ダリ・ピカソなどを扱い, 写真美術館 Fotografiska Museet, the Museum of Photographyを併設する。そして③は, 過去から現在に至る東洋文化を対象に, 美術・文化史・考古学に関する資料を収集・保管・研究・展示する場と規定され, あわせて東方図書館 Östasiatiska Biblioteket を置くことが記されている。

「国立美術館群」の長は文部大臣に直属し, たいていは①の館長を兼ね, ②・③の館長がその補佐にあたる。事務局は①に置かれ, 大工・電気系統を扱う展示技術部局, 海外派遣を含めた輸送部局や, 全体的な美術品補修のアトリエも①にある。建物の規模も①が最も大きく, ②・③は過去にそれぞれ①から分離・独立したという経緯を持つ。

II 館の歴史

それでは, 東方博物館の歴史を追ってみよう⁸⁾。

8～9世紀のスウェーデンの首都であったビルカでは, 唐の絹片が発掘されている。これによりスウェーデンと東洋との接触は, 唐の時代まで遡ることができる。くだって17世紀になると明の磁器がもたらされ, 1731年のスウェーデン東インド会社の創設により, 中国製品が更に流入するようになる。しかしスウェーデンにおいて古代中国美術品の体系的な収集が始まるのは, ヨーロッパで東洋への関心が復活した19世紀末のことである。

20世紀に入ると, 当時皇太子であったグスタフ6世 Gustaf VI Adolfが中国美術に関心を持ち, 熱心に研究・収集を始め, また多くのスウェーデン人研究者や収集家が現れた。地質学・考古学者アンデション Johan Gunnar Andersson, 地理学者・探検家ヘディーン Sven Anders Hedin, 考古学者ヤンセ Olov Janse, カールベック Orvar Karlbeck, パルムグリーン Nils Palmgren, 美術史家シリーン Osvald Sirén, シェンペ Carl Kempe, 言語学者カールグレン Bernhard Karlgren といった人人がよく知られている。彼らは考古学・言語学・民族学・美術史などの研究に従事し, その他にも私的な収集家が多数存在していた。彼らのコレクションが, その後国

立美術館に寄贈されていくことになる。

またスウェーデンにおける中国の自然史・考古学研究の中核機関として1921年に設立された, 中国研究委員会 the China Research Committee (委員長は皇太子)が, 資金を供給して資料を購入し, そのコレクションが1929年に公開されて「東方博物館」⁹⁾の基礎となった。次いでヨーロッパで国際的な中国美術の展示会や研究報告会が開催されるようになると, スウェーデン国内でもコレクションの公開がたびたび企画された。グスタフ6世が即位したのは1950年のことである。彼は常にこれらの研究や資料収集のスポンサーであり, かつその原動力であった。皇太子時代には自らも考古学者としてギリシャで発掘するなど, 熱心な考古学の後援者としてよく知られ, 1926年には来日し, 千葉県柏井貝塚の発掘への参加や, 正倉院における陶器の調査を行っている¹⁰⁾。

第二次世界大戦中も個々の研究は中断されることなく続き, それらは当時の「東方博物館」の紀要やその他の様々な研究書に発表されている。戦後に再開された収集活動も, 1950年に中華人民共和国から中国古代資料の流出が停止されるまで続けられた。国内では良質の個人コレクションが次々に国立美術館や「東方博物館」に寄贈され, また国王自身もコレクションを増やし続けた。

1933年から国王の助言者を務め, そのコレクションの保管責任者でもあったパルムグリーンが1955年に亡くなると, それを引き継いだのがユールンスバード Bo Gyllensvärdである。彼は既に1943年にシリーンの後を受けて国立美術館の東洋部門の長に任命されていたが, 国王との密接な協力関係が始まるとすぐに, 当時国立美術館と「東方博物館」の2館に分散していた中国考古資料や絵画などの美術品の主要なコレクションを1つの建物にまとめる必要を提案し, 国王の同意を得た。

慎重な討議を経て1959年に新しい博物館の企画が具体化される。その際に国王は, いずれ彼のコレクションの全てをこの博物館に寄贈するという意志を内々にユールンスバードに示し, その後は館にとって重要な資料を優先的に購入するよう努めた。「我々はこの館をできる限りよいものとするよう努力し, また既に持つ長所をさらに伸ばしていかなばならない。」と, 国王はしばしば口にしたという。国立美術館に隣接する島にあった, 1700年に騎馬親衛隊の厩舎として建てられ, 後に海軍の貯蔵庫となっていた古い建物を改修し, 資料を一括した新しい博物館が開館したのは1963年5月16日のことである。初代館長にはユールンスバードが就任した。これが即ち現在の東方博物館である。ちなみに1958年には国立美術

館から近代美術部門が同じ島の旧海軍体育館であった建物に移り、現在の近代美術館となっている。

その後も資料購入や貴重な個人コレクションの寄贈が続き、特に1973年に国王が亡くなると、約2600点に及ぶ彼のコレクションが当館に加わり、一層充実した内容を備えるようになった。現在においては中国・日本・韓国・インド・ベトナム・インドネシア・フィリピン・タイ・モンゴルの資料、石器時代から現代に至る土器・石器・青銅器・陶器・漆器・絵画・彫刻・工芸品など、あわせて11万点を所蔵する。中国美術品がその約80%を占める。特に充実している分野としては、石器・青銅器時代の考古学資料、仏像彫刻、明清時代の絵画、漢から清代までの陶器・漆器、そして翡翠・象牙・竹の工芸品などがあげられる。

III 組織と活動内容

当館の開館時間・入館料については、以下のとおりである。

(開館日) 火曜日11:00-21:00, 水~日曜日11:00-17:00

(休館日) 月曜日

(入館料) 大人 20SEK

学生・年金受給者 10SEK

小人(16才以下) 無料

※ただし、水曜日は全て入館無料

1階にコインロッカー・クローク・受付・売店があり、展示室として公開されているのは5階建ての4階部分まで(下図参照)、その他に講堂・図書館がある。また事

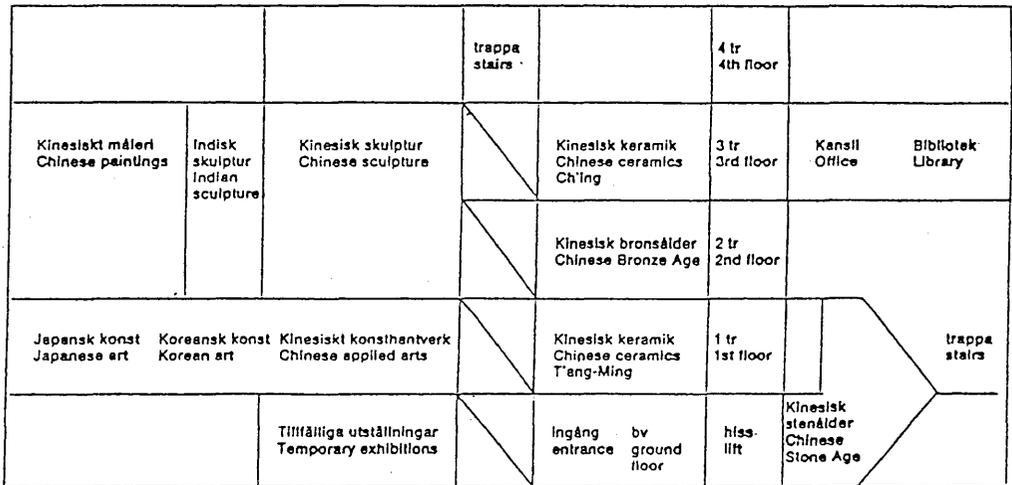
務室及び研究室は4階にあるが、資料の収蔵庫については、「警備上の理由から」、その位置すら一般には公にされておらず、筆者もまた知ることを断られた。売店ではカタログ・東洋関係の書籍の他、中国や日本の工芸品、陶器・漆器といった比較的高価なものまで扱っている。

では次に、2年ごとに出版される館の活動報告書¹¹⁾とインタビューで得た情報をもとに、当館の組織及び活動内容を明らかにしていこう。

1. 職員

まずここに1986年12月当時の職員構成をあげる¹²⁾。

(職名)	(人数)
Museidirektör och chef (館長)	1
Förste intendent (主任インテント)	1 ¹³⁾
Intendent (インテント)	1
Informationssekreterare (広報担当秘書)	1
Byråsekreterare (事務担当秘書)	1
Assistent (アシスタント)	1
Konservator (コンセルヴァトゥール)	1
Bibliotekarier (図書館司書)	2
Förste Biblioteksassistenter (司書アシスタント)	2
Förrådsförvaltare (収蔵資料管理者)	1
Museitekniker (展示技術担当者)	1
Assistent; Butiken (売店)	1
Assistenter; Entrékassan (受付・会計)	2
Museivakt (守衛)	1
Timanställda guider (時間給ガイド)	7



Plan över museet (sektion)/Section plan

ここでは総勢24名が載るが、さらに「国立美術館群」に所属する技術系のスタッフが出入りし、常時25名前後で運営されている。また常勤者は、原則として月～金曜日 9:00-17:00の勤務であり、土・日曜日の開館のためには、売店・受付・守衛に非常勤のパートタイマーを採用している。

博物館の専門職であるインテンドント・ガイド・コンセルヴァトゥールについては、以下に説明を加えよう。

(1) インテンドント

インテンドントは専門的知識を備えた研究者であり、日本における「学芸員」にほぼ相当するものであるが、実際の職務を見ると、かなり狭義の研究職であると言える。英訳では 'curator' である。その仕事は次の4つに大きく分けられる。即ち、①研究、②展示、③カタログ・ガイドブックなどの執筆、④教育活動、である。

スウェーデンの大学には、特にインテンドント養成課程が設置されているわけではない。希望者は、一般的には考古学・民族学・歴史・美術史などを修め、様々な博物館で実習することによって、インテンドントとしての基礎を身につける。博物館学も設けられているが、必修ではなく、また「インテンドントの資格」も存在しない。よって資格を得るための試験もない。そのかわりにスウェーデンでは、学生個人で行う博物館における実習が、殊に重視されている。それは夏の長期休暇などを利用し、アルバイトとして様々な博物館に勤め、経験を積んでいくものである。彼らは大学の授業と博物館実習を併行させて学ぶ¹⁴⁾。ちなみにインタビューに応じてくれたレイヨン氏は、当館に既に25年前から関り、インテンドントのアシスタントから出発したという。この東方博物館では、大学で東洋美術史(中国・日本・インドなど)または考古学を専攻し、中国語もしくは日本語を話せることが必要とされる。

インテンドントは資料に関する専門家であり、研究者として論文を発表し、大学での講義や内外の講演をこなす。しかしその一方で、館の教育活動全般に責任を持つものでもある。展示は博物館教育の根本であり、所蔵する約11万点の資料は常設展・特別展において市民に公開される。インテンドントはそれらの展示プランをたて、実際に資料を設置し、解説ラベルを作成し、入館者の資料に対する理解が深まるべく工夫する。展示品のカタログやガイドブック執筆も、自己の研究成果を発表すると同時に、市民への情報提供となる。インテンドントは、常に展示に結び付いた研究を行っているのである。

なお館長は、インテンドントとは呼ばれないが、職務

的にはインテンドントの延長線上にある。館長としての事務的職務を果たすのはもちろんのことであるが、専門職としてはインテンドントと同様、研究・展示・執筆といった仕事をこなしている。

また入館者への展示解説も、インテンドントの仕事の1つである。以前は全ての解説をインテンドントが行っていたが、業務多忙になるに及び、解説のためのスタッフとしてインテンドントの下に数名のガイドが配属された。現在はインテンドントとガイドの両者が展示解説に携わっている。そこで次に、ガイドについて述べよう。

(2) ガイド

彼らは時間給で雇われており、博物館に常勤しているわけではない。しかし教育活動においては極めて重要なスタッフと言える。詳しくは教育普及活動の項で述べることになるが、彼らは博物館が毎週土・日曜日に行う定期的な展示ガイドツアーや、その他の臨時ツアーで、自由参加の聴衆を前に、展示解説をしながら館内を巡るのである。従って資料に関する専門的知識が必要とされる。彼らは美術史などを専攻とする学生やその卒業生である。なかには中国や日本に滞在・留学していた人がいて、各ガイドの専門分野に任せてツアーの内容が組まれることもある。彼らは、ツアーのためにガイドとして来館した時間に対してのみ報酬を受け取っている。

ところでここで、博物館の教育活動に関わる専門職員として、博物館教師 museum teacher についても触れておこう。当館には配属されていないが、国立美術館でその活動を見ることが出来る。彼らは美術館に常勤し、来館する児童の世話をすることがその職務である。9:00-12:00 または 13:00-16:00 という時間帯で、クラスルームにおいて学童相手に資料を使って講義・指導を行う。ガイドと異なり、ツアーを組んで展示解説をすることはなく、また彼ら自身が展示に携わることもない。しかし彼らはインテンドントによってなされた展示をうまく利用し、説明することができなければならず、その点ではガイドと共通するものがある。それに対してインテンドントは、展示内容の科学的正確さについて責任を持つことを要求されるのである。

(3) コンセルヴァトゥール

コンセルヴァトゥールは資料の取り扱いに関する専門家であり、技術者である。コンセルヴァトゥールについては、適当な邦訳が見当らず、日本では現在のところ存在しない職名である。英訳では 'conservator'。展示の目的に沿うように資料を整備し、洗浄・塗装・修理を施し、資料の保存・保管に対して責任を持つ。

その専攻分野としては主に化学があげられるが、実際のところ、スウェーデンにおいては東洋美術品の取り扱いを教授できる学校は存在せず、結局は「経験を通して」知識・技術を習得することになる。彼らは実用的な面から資料の取り扱いや保存方法を研究し、互いに議論し、欧米各国の同業者と会合して情報交換し、また実際に中国や日本から技術を学ぶ。ちなみに現在のコンセルヴァトゥールの女性は、当館において20年以上コンセルヴァトゥールのアシスタントを務め、そのコンセルヴァトゥールが退いてポストがあいた際に、他の応募者と比較の上で、彼女の経験と知識がより豊富であることから、採用されたものである。

インテンドントとコンセルヴァトゥールでは、明確に職掌が分担されている。前者は資料に関して美術史を始めとする理論的教育を受け、かつ原史料解説可能な語学力が必要とされる。後者にはその必要はないが、かわりに資料に関する実用的な知識を持っていなければならない。即ち、ある1つの資料について、インテンドントはそれがどこからきたいつのものか判断し、その情報を提示することができるが、保管については自らそれを行うことはできない。一方コンセルヴァトゥールは、その学問的な意義はわからなくとも、いかに取り扱うべきか最も適切な方法を知っている。レイオン氏が端的に表現したところによれば、インテンドントの知識は'theoretical'であり、コンセルヴァトゥールのそれは'practical'なのである。

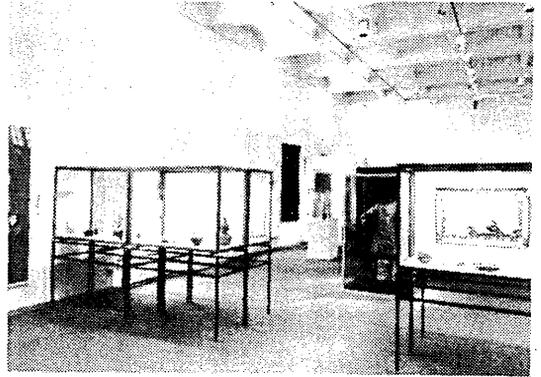
(4) 職員の採用

博物館のポストがあくと、その欠員募集は新聞広告によって公にされる。インテンドントの場合には、1人の定員に概ね5~10人の応募がある。応募者に対しては博物館で面接を行い、専門分野や語学をチェックする。そして館としては誰を採用したいか、その結果を評議会に提出し、そこで最終決定がなされる。評議会は、政府により任命された任期3年の委員からなる、「国立美術館群」に置かれた諮問機関であり、博物館側には採用決定権はない。従って、採用されなかった人が不満を持って行く先も、博物館ではなく評議会になるのだそうである。いずれにせよ、専門職としては、知識に加えて経験が特に重視されることが強調されている。

2. 設備

美術品を扱うため照明には意が払われているが、自然光も採り入れ、概して展示室は明るくスペースに余裕がある(写真A)。各室に防犯カメラが備え付けられ、それは入口の受付内のモニターでチェックされる。また警

備員が各階に2~3名ずつおり、適宜見回りをしている。



写真A：中国彫刻室で行われた特別展「花をモチーフにした中国美術品」

ほとんどの室内には、入館者休憩用のイスは設置されていない。しかし1階に軽量の小型折りたたみイスがまとめて置かれており、希望者は自由にそれを持って展示室を巡ることができる。そしてじっくり展示を見たい場合や、疲労した際には、どこでもそのイスを広げて腰をおろせばよい。このイスの利用は、スウェーデンにおける他の博物館でも非常に多く見られた。入館者に対する細かい気配りと、合理性の表れと言えるのではないだろうか。

スウェーデンの博物館では、館の内外にスロープやエレベーターが完備されている。従って車イスや乳母車は、そのまま展示を鑑賞することが可能である。実際、館内では彼らの姿をしばしば見かける。これはやはり福祉国家たる同国の特徴とすべき点であろう。

1階にはかなり広いクロークがあり、コート・帽子などを自由に置くことができる。これも他の博物館と共通しており、冬の寒さ厳しい北欧ならではの設備である。

3. 展示

(1) 常設展

53頁の見取図からもわかるように、常設展は1階から4階にかけて、①中国石器時代、②中国青銅器時代、③中国陶磁器(唐~明)、④同(清)、⑤中国彫刻、⑥中国絵画、⑦インド彫刻、⑧日本美術・韓国美術・中国工芸品、の8室に設けられている。展示総数は館蔵資料の30~40%、約4000点に過ぎないが、よく知られた資料は常に展示されているようにする。これは、ある資料を書物や論文で知り、それらを展示で実際に見ることを期待して来た研究者などに対する配慮である。また特に貴重な資料は、

保存・警備上の問題から、常時展示されるわけにはいかない。しかしその他は、比較的頻繁にインテンドントの手によって展示替えが行われている。

常設展示品には、スウェーデン語と英語の両方の解説ラベルがつくが、レイヨン氏は更に中国語のラベル設置の必要性を主張する。なぜなら、その3ヶ国語があれば、世界中からの入館者にほぼ対応することができるからである。例えば日本人ならば、中国語の漢字を見て、なんとなく意味を解することが可能であろう。

常設展の設備として特筆したいのが、ショーケースに付属するガラス張り引出しの活用である。青銅器や陶器の展示では、壁一面に備え付けられたショーケース内の資料に、整理番号しかついていない。そして腰の高さにある薄い引出しを手前に引くと、資料の番号とそれに対応する解説が見られる仕組となっている(写真B)。工芸品・細工品の類の小さな資料が、その引出しに細かく分類されて並べられているものである(写真C)。

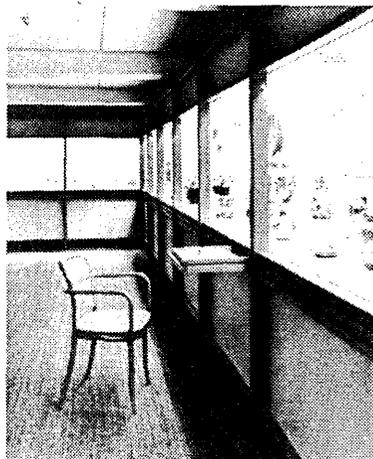
中国の掛軸の展示では、展示用のボードが幾重にも引き出せるようになっていて(写真D)、それにより展示にバラエティーを持たせることができる。また、日本でいう箆笥のようなケースがあり、その1段ごとに掛軸や絵巻物が広げて収納され、入館者が自由に引き出して閲覧できるようになっていた(この引出しもガラス張りである)。

この引出し方式は、スウェーデンの博物館ではしばしば見かけたが、非常に洗練された、見やすい展示と言える。ただしその一方で、入館者の関心とマナーに負うところが多いため、その実効については一概に述べがたいものと思われる。

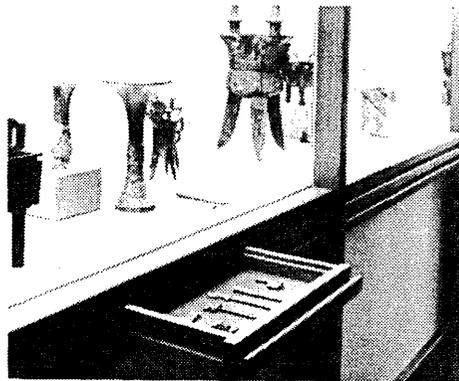
次にここで、日本に関する展示について触れておく。1989年1月の段階では、館長も含めたインテンドントは3人とも中国を専攻する研究者であり、日本を専門とするスタッフはいない。ただし、当時日本の京都大学に留学し日本の美術史を研究中の女性が、近く帰国し、年次雇用のインテンドントとして日本を専門に受け持つ予定とのことであった。もちろんその他のインテンドントも日本に関して学び、知識を蓄えており、展示解説・講義・執筆などをこなしている。

日本の資料は、寄贈を受けたもののみならず、購入したものも多い。ヨーロッパや日本のオークション・古物商から入手するそうである。常設展では陶器・漆器・刀剣・鏝・甲冑・根付・印籠・仏画・木版画・浮世絵などが見られたが、近世以降の資料が多い。

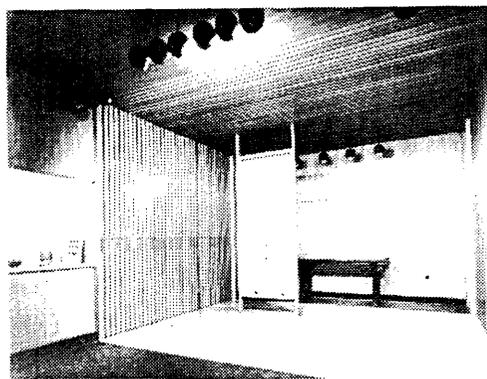
展示室の壁面には、日本史の時代区分を示す年表と、その簡単な解説を記したボードが掲げられる¹⁵⁾。また



写真B：清時代の陶磁器の常設展示室



写真C：中国青銅器時代の展示ショーケース



写真D：中国絵画の展示室と展示ボード

1575年の長篠の戦いの模型があり、当時の社会情勢とこの戦いの意義について解説を加えている。これは人目を引くものであり、大変おもしろかった。一般的に展示解説は簡潔で、概説的ではあるがわかりやすい。

最近では、館蔵資料から刀剣・着物と帯・陶器・刺青が特別展として採り上げられ、また東京富士美術館の協力で、日本の自然を題材にした写真展も開かれている¹⁶⁾。なお1990年には、同館資料を東方博物館で展示する特別展企画があるということであった。

そもそもスウェーデンにとって、日本はなじみの深い国ではなかった。しかし昨今は、情報網の発達により日本に関する知識も増え、特にその政治・経済力が注目されるにつれて、人々の日本に対する関心も高まってきている。東方博物館では、現代の姿も含め、広く日本の社会を人々に紹介することを、その務めとしているのである。

(2) 特別展

常設展では公開しきれない資料や、まとまったコレクションの紹介、テーマを設定し外部から資料を借用して行う展示などのために、特別展が開催される¹⁷⁾。1階に特別展用のかなり広い部屋が1つあるが、常設展示室内でも適宜行われている。原則として、毎年2つの大きな特別展と3~4つの小規模な企画があり、基本的には春と秋に分けて行われる。期間は3週間程度から5ヶ月近いものまでまちまちであり、それらは常に2~3併行している。1989年1月のインタビュー時には、特別展示室で、十二支中の龍をテーマに中国の資料を展示した「龍年特集 Drakens Ar」、インド彫刻室を使い、各国の仏像や仏教画を展示した「仏教美術 Buddhistisk konst」、各展示室の一角を利用して行われている「新規資料展 Nyförvärv 1983-1988」の3つが開催されており、いずれも館蔵資料であった。

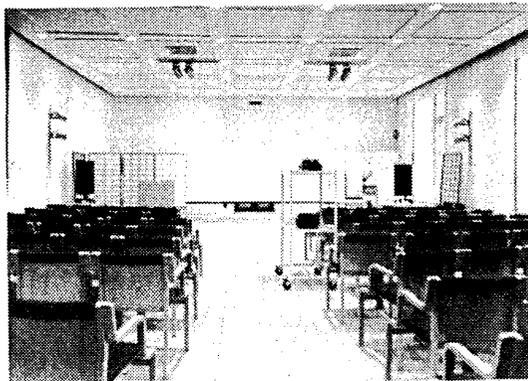
特別展については、解説ラベルはスウェーデン語表記のみに限られる。これは時間的制限や人手不足といった実際的な理由からである。なお特別展の開催は、新聞広告により市民に知らされる。

4. 教育普及活動及びサービス

教育普及活動は、館が主体となって市民の積極的な参加を促し、市民の学習を支援するとともに、博物館の研究成果を市民に還元するものである。ここでは、講演会・講義コース・ガイドツアー・学習サークル・各種講座・美術品鑑定について述べよう。市民はそれらの情報を新聞広告で入手できる。

(1) 講演会及び講義コース

特別展のテーマに基づき、講堂で専門家が詳しい解説を行うのが講演会である。特別展の期間中に設定され、講師には大学教授や内外の研究者が招かれる。スライドや写真が利用されることも多い。講堂には125人収容でき、映像用の設備が整っている(写真E)。



写真E：講 堂

また特別展に限らず、東洋美術一般に関するテーマで専門家の講演会が開催されることがあり、不定期ではあるが年に9~10回行われている。もちろんインテントがこれらの講師を務めることもある。これには博物館友の会との共催も含まれる。例えば1985年には、「日本に関する講義シリーズ Föredragsserie om Japan」が設けられた。これは、5回にわたり、日本の宗教・歴史・文芸といったテーマで様々な話がなされたものである。また、「サムライの武装 Samurajens vapen」と題し、武士装束のデモンストレーションが行われるなどしている。原則として参加費無料。

その他に、外部から講師を招き、定期的な連続講義を設定して学習するコースがある。ここ数年の例としては毎年春と秋に各1コース(1週間に2回、計20回)、8月に1コース(土・日曜日を除く15日間連続15回)という日程で、中国書道と漢詩を教授している¹⁸⁾。ただし、このコースへの参加費は有料である。

(2) ガイドツアー

特別展に関しては、定期的に展示解説が行われる。ガイドが展示室内で資料を前に解説して巡るので、「巡回解説 Rundvandring」と呼ばれる。毎週土・日曜日の14:00より約45分間、入館者は誰でも参加できる。聴衆の反応次第で多少時間が延長されることもあり、またガイドの専門領域によって、特別展に限らず様々な展示解説がなされる。特別展が全くない時は、常設展を見せながら全館を歩き回る。ツアーへの参加者は、たいていは15

人前後から50人ほどであるが、特に話題を呼んだ特別展の際には、200人にも達したことがあるという。このガイドツアーは、あらかじめ日時とガイド者名が明記され、受付横の掲示板や新聞広告で告知される。

また団体が来館する際には、希望があれば臨時にガイドツアーを設定する。その場合、まず2～3日前までに、その団体から当館の秘書に対し希望日時の依頼がある。そして秘書が、各ガイドと電話連絡で日時・内容の調整をはかり、ツアーの担当ガイドを決定する。この臨時ツアーは、小学校の学級や企業内の美術サークルなどに多い。

ところで小学生の団体は、カリキュラムの関係で平日の午前中を希望する場合がしばしばある。その時には、博物館自体の開館は11:00であるが、9:00に彼らを受け入れている。休館日である月曜日を除き、常にガイドツアーを行う準備があり、その柔軟な態勢を高く評価できよう。館側としては、小学生団体に対するガイドツアーを非常に重視している。このツアーをきっかけに館への関心が高まった子供たちは、次にはその親とともに再び来館する可能性が高いということである。

なおガイドツアーはたいていスウェーデン語となるが、聴衆の希望によって、各国語での対応が可能である。現在は、インテンドントを含めたガイドスタッフで、スウェーデン語・英語・ドイツ語・フランス語・フィンランド語・中国語・日本語をこなしており、さらにスペイン語を使える人物を必要としているところである。

(3) 学習サークル・各種講座への協力

スウェーデンでは、市民の自主的な組織である学習サークル活動が大変盛況である。これは非常に伝統的な成人教育の一形態で、公的補助を受けており、参加者も多い¹⁹⁾。当館のインテンドントはしばしば美術関係のサークルに参加し、教授・講義をしている。ほとんどの学習サークルは平日の夜間に開かれるので、インテンドントは館の勤務終了後に出席することになる。

またインテンドントが、各種教育機関の公開講座の講師に招かれることも多い。一例として、ストックホルム大学主催、成人対象の1989年春期公開講座(有料)があげられる。その美術のコースに、日本の伝統的生活をテーマにしたものがある²⁰⁾。そこでは、当館インテンドントのレイオン氏とソンマルストレーム Bo Sommarström 氏、ガイドを務めるメイヤー Charlie Meyer 氏が、各2回ずつ計6回の講義を行う。そのうち5回は、水曜日の夕方に、市内の各種講座用の教室で行われる。そして第6回目の講義は火曜日にて、18:30より当館での見学及

び解説(この時のガイド役はレイオン氏)を行い、コースのまとめとする。開館時間が21:00までである火曜日を有効に利用しており、また館側もこのような講座をバックアップしていることがわかる。

(4) 美術品鑑定

一般向けのサービスの1つとして館が重視している活動に、「美術品鑑定 Mottagning för bedömning av konstföremål」がある。これは東洋美術品の鑑定を無料で行うものであり、6～8月と12～1月を除く、毎週火曜日14:00-16:00に設定されている。人々は1回に5品まで持ち込むことができ、インテンドントはそれらを見て、制作地・年代・作者・名称・質の良し悪し・美術品としての価値などを教示する。ただし経済的評価、即ち値段については一切言及しない。この鑑定のために来館する人は、年平均300～400人ほどにのぼるとい²¹⁾。

5. 入館者

概してスウェーデン人は、博物館に親しみよく足を運ぶように見受けられた。外国人としては、フィンランド・ドイツ・アメリカ・日本の順で入館者が多いということである。そこには、ストックホルムを訪れた観光客のみならず、かなりの数の専門研究者も含まれている。やはり観光シーズンの6～8月にはいくらか多めになるが、暗く寒く長いスウェーデンの冬にも拘らず、冬場に入館者が特に減少するということはない。それよりもむしろ、特別展のテーマによって人数に差が出る。市民の中には、展示替えが行われるたびに訪れるという人々もいるのである。また夏冬の休暇の時期には比較的外国人が多く、春秋の特別展には身近なストックホルム市民が熱心に訪れるという傾向がある。

入館者数は、大まかに言えば、月平均にして5000～7000人、年平均では10万人前後である²²⁾。ストックホルム市の人口が147万人(1988年12月現在、スウェーデン中央統計局調べ)であることを考えれば、これは決して少なくない数字である²³⁾。

6. 印刷物・出版物

印刷物としては、館のお知らせ・特別展の案内・講座の募集などの他、展示室見取図・簡単な展示解説・語句説明・中国時代区分表を載せたA4版のリーフレットがある。これらは受付付近に置かれ、無料で自由に受け取ることができる。ただしほとんどはスウェーデン語である。

また、インテンドントの執筆による常設展カタログと過去の特別展カタログ²⁴⁾が売られている。前者はスウェーデン語・英語併記、後者は本文がスウェーデン語で、

英語の要約を付す。

紀要 *Bulletin of the Museum of Far Eastern*

Antiquities は、毎年発行され、館内外の研究者の研究論文が掲載される、英文の学術雑誌である。1988年で第60号となる。

年間活動報告書 *Östasiatiska Museet och Föreningen Östasiatiska Museets Vänner* は、博物館友の会と協同で2年に1冊発行される。これは、2年間の館活動全体を網羅して報告するものであり、誰でも購入できる。スウェーデン語で書かれ、内容は館の活動概観に始まり、新規資料目録、図書館・出版・教育普及諸活動の記録、特別展一覧、入館者数などの統計、スタッフ名簿、インテントの業績、資料紹介・研究論文、友の会の報告と会員名簿で構成される。

展示活動報告の項では、その展示を担当したインテントの名が明記され、またインテントの業績についても、執筆活動や講演、海外出張に至るまで、館の内外にわたって詳細に紹介されている。新規資料の目録と紹介は、過去の報告書を遡れば、それがいつどこから入ってきたかすぐにわかる所蔵品リストとなる。この報告書の作成は、館にとっても重要視されるべきことであり、総じて、非常に精確で内容の濃いものであると言えよう。序文と概観は館長が、新規資料目録・資料紹介・研究論文は、館長も含めたインテントが、分担執筆している。

7. 図書館



写真F：東方図書館閲覧室

1986年7月に、それまでの館蔵書に加え、王立図書館とストックホルム大学の中国関係図書の移動を受けて、総合的な東方図書館が新たに開館した(写真F)。現在では東洋に関する書籍を40万冊以上所蔵し、また研究者

から寄贈された文書史料などの保管もしている²⁵⁾。これは広く学生や研究者に公開され、年間に350~400人の利用者を数える²⁶⁾が、貸出しはしない。新図書館は北部局と南部局に分かれ、各局に司書1名アシスタント1名、計4名の職員が配置されている。

8. 博物館友の会

友の会 *Föreningen Östasiatiska Museets Vänner* は、東洋美術に関する理解を深めつつ、博物館活動を補佐することを目的とした団体であり、現在は約1500名の会員を擁す。1989年の会費は、一般250SEK(夫婦で入会の場合1人200SEK)、年金受給者175SEK(同150SEK)、30才以下110SEKである。会員には、東方博物館のみならず国立美術館・近代美術館の入館料が免除され、展示案内や、特別展の事前鑑賞・講演会への招待といった特典に加え、定期的に博物館の年間活動報告書が届く。友の会が主催する講演会も盛んで、様々なテーマを設けて、年に15~20回ほど行われている。博物館の講堂を使用し、館との共催も多い。

IV 社会との関り

当館は、スウェーデンにおける東洋研究の中核機関である。資料を保管し、専門の研究者を擁するという点で、研究機関として確固たる位置を占めている。また図書館を併設することにより、外部の研究者や学生など、一般にも開かれている。その一方で、社会教育機関である博物館としての活動も、非常に充実しているように思われた。これまでに、当館の概要と活動状況を明かにしたところで、次にその特徴的な点をいくつか採り上げ、当館と社会との関り方を考察してみよう。

1. 他館との連携

まず、「国立美術館群」という行政組織に着目したい。もとは、国立美術館・近代美術館とともに、1つの美術館であったわけであるから、技術系スタッフや輸送の専門部局、修理アトリエは、「国立美術館群」内で共用される。従って、小規模館特有の人手不足や、施設面での不備はない。それでいて、各館は分離独立した建物で、それぞれの活動が可能であり、独自の個性を持つことができる。

他の博物館も、「国立美術館群」と並列して、文部省に統括されている。その数は、ストックホルム市内では約50館に及ぶ。スウェーデンの博物館は、ほとんどが国立・王立である。地方公共団体による館もいくつかあるが、私立は非常に少ない。博物館間の連携は密であり、様々な会議や委員会、研究会が定期的にもたれている。これ

には、館長・インテント・コンセルヴァトゥールなどの、それぞれの横のつながりがある。博物館全体の問題を取り扱うことにより、相互に館活動の向上を目指すのである。例えばレイオン氏は、月に1回開かれる警備体制に関する会合に、館代表として参加している。そこでは、新しい警備システムの紹介・警備員の研修コース・警備料金の相互援助・警報装置・非常時の対処方などについて、話し合いがもたれている。

2. 非常勤職員の活用

当館は、決して大所帯ではない。しかし、円滑な館運営ができるよう、しかるべきところに人員が配置されている。その職掌分担は非常に明確であり、かつ合理的である。さらに、事務系のパートタイマーが多いことに注目できよう。

パートタイマーと言っても、その実態は、日本のそれとはかなり差がある。パートタイムは、フルタイムに対し、1日のうちある決まった時間のみ労働するものであるが、スウェーデンにおいては、労働力として社会的にかなり認知されている。従ってその需要も多く、またパートタイムで働く側の意識も高い。

同国では、男女平等がうたわれ、夫婦共働きがよく普通である。失業率は低く、様々な社会保障が整い、働く意志のある人には常に労働の場が与えられるよう、国家が努力を払う。そこには、フルタイムであろうが、パートタイムであろうが、個人が生活を営む上での社会的な有利不利は全く生じない。非常勤・パートタイムの職をいくつか掛け持ちして生活している人々も、男女を問わず、また年齢を問わず少なくない。それは全く特殊なことではないのである。ちなみに、スウェーデンの女性の有職率の高さはよく知られているが、乳幼児を持つ母親は、パートタイムで勤める場合が多い。

その意味では、残念ながら、日本との根本的な違いが存在する。しかし、市民に対するサービスが重視されるべき博物館にとっては、この非常勤の人材は、重要な意味を持っているのである。

一般的に言って、人員と開館状況には密接な関連がある。そこに、社会教育施設としてのジレンマが存在している。しかし、ここでは非常勤の人材を活用することによって、その壁を乗り越えている。

インテントやコンセルヴァトゥールの勤務は、原則として月～金曜日の5日間である。夏冬の長期休暇も、彼らにとっては当然のこととなっている。権利としての「休暇」の意識は、非常に厳密である。その一方で、受付・売店・警備のための非常勤職員が、常勤職員の勤務

時間外に出勤し、市民のための開館に支障をきたさない配慮がなされる。即ち、火曜日の夜間や、土・日曜日である。火曜日夜間には、単に一般入館者を受け入れるのみならず、サークルの見学会や各種学習コースが設定されており、開館時間の延長が非常に意義のあるものとなっている。結果として、土・日曜日は、事務室・研究室に正職員は誰もおらず、逆に月曜日は閉館のため、受付・売店に誰もいないということになる。

これは大変合理的なシステムと言えよう。開館という業務が個人的な犠牲や負担にかかることを避けながら、社会教育施設として、市民に有益な運営がなされている。これが館側の柔軟な態勢を生み、市民に対するサービスが行き届く結果となるのである。

3. 職掌の分担

ここでは、職掌の分担についてまとめてみよう。まず博物館専門職は、資料研究を担当するインテント・資料の取り扱いを担当するコンセルヴァトゥール・資料の説明を担当するガイドに分掌される。それぞれの業務が忠実にこなされれば、博物館資料に関する連続した1つのシステムとして、それが有効に機能することになる。

事務系スタッフにしても同様のことが言える。例えば秘書は、事務担当と広報担当に分れ、前者は主にインテントの補佐や一般的な庶務事項、後者は広報活動や報告書の編集などを担当する。展示においては、電気系統や大工仕事専門のスタッフがおり、技術面は全て彼らに任せることができる。図書館には司書が配属されている。図書館管理が専門家の手に委ねられることは、職員・利用者相方にとって有益である。

このように明確な役割分担がなされることにより、それぞれが職務に対し熟練し、その内容も充実していくであろう。パートタイマーも含め、この合理的な人員構成は見習うべき点ではないだろうか。

次にインテントについて言及しておこう。彼らは、事務的処理は全て秘書に任せることができる。しかし、研究・展示・教育という彼らの仕事を考えると、実際のところは非常に多忙である。原則にいう9:00-17:00の勤務時間は、しばしば夕方から夜間にかけての講演やサークルへの参加で延長される。ストックホルム市内の他の博物館とは、インテント相互の情報交換や研修・会議が頻繁にある。市民に対するガイドや美術品鑑定といったサービスも彼らの仕事であり、時間的拘束も受けよう。資料研究・教育活動の専門家として、その責任は明確にされているだけに重い。報告書には、展示のアレンジの責任者として名前が記され、その業績は逐一報告

される。しかし、研究者として、またインテンドントという博物館専門職として、館において確固たる役割を果たしていると言える。

こうして見ると、日本の「学芸員」とはかなり異なる存在と言えるのではないだろうか。日本の現状では、「学芸員」はインテンドント・コンセルヴァトゥール・ガイドの職務を全て兼ね、一方で事務的処理も自分でこなさなければならない場合が多い。広告の企画や報告書の編集・発行まで任されていることも少なくない。「学芸員」が、しばしば「雑芸員」とあだ名される由縁である。それに比べスウェーデンのインテンドントは、研究職として自立した存在であると見受けられた。

さらに付け加えるならば、館長自身が専門研究者としてインテンドントの職務を果たすことも、注目にあたいしよう。これは非常に重要な意味を持っている。なぜなら、博物館を行政レベルで考える際に、館長のインテンドントとしての視点が、博物館にとって、より有益なものとなるからである。これは、現在の日本においては、比較的見過ごされてきたものではないだろうか。

スウェーデンにおいても、インテンドントになるのは簡単なわけではない。歴史や考古学、美術などのコースで学んでいる学生にとっては、インテンドントは非常に魅力的な職業である。しかし、そのポストは決して多くはなく、しかも経験重視という前提がある。従って、学生のうちからアルバイトで経験を積むなり、非常勤で助手を務めるなり、専門を生かしてガイドを引き受けるなりするのである。それが、ポストを得るための第一歩となる。

4. サービスと宣伝

博物館としての市民に対するサービスについては、既に各項で述べてきたが、改めてここで触れておく。特筆すべきは、市民に対して窓口をはっきりと設け、サービスをシステム化していることである。例えば、ガイドツアーにしても美術品鑑定にしても、市民はいつでも申し込めばよいか、常に知らされている。また講座を積極的に設け、東洋に関する文化センターの役割を果たして、いかなる市民の要求にも応える姿勢を保っている。

設備面で言及したいのが、スロープやエレベーターの完備である。これらの設備は、スウェーデンでは当然のことと認識されている。入館者の立場を考え、その要求を受け入れ、全ての人に対して開かれていることが、社会教育施設としての理想であろう。日本では、まだまだ不備が目につく。とはいっても、車イスや乳母車が普通の人々と全く同様にバスや地下鉄に乗車するという、

この国の社会的背景を考え合わせる必要があろう。また、館側に設備を整える義務があるとすれば、入館者には、鑑賞のマナーが要求されよう。公共施設利用の常識というものもあるに違いない。しかし、サービスを通じた博物館と市民の交流こそが、博物館活動をより前進させるものとなるのである。

博物館の活動を市民に知らせる第一の方法が、新聞広告である。スウェーデン国内有力3紙に、それぞれ週1回、ストックホルム市内全博物館の住所・電話番号・入館料・その週の催し物といった、かなり詳細な情報が必ず掲載される。また、一般旅行者向けに毎月発行されている、無料のガイド小冊子 *Stockholm This Week* にも、市内全博物館の紹介と、特別展の情報が載る。さらに、街中いたるところに、博物館の広告ポスターが目につく。博物館の存在は非常に強調されており、情報入手は容易である。

その他に、当館では、毎年3~5月中の15日間ほど、館内売店の安売りセールがある。これは、市民を呼び込む工夫であると言える。売店では高価な東洋美術品類も取り扱っているので、このセールは結構賑わうようである。

5. 社会的背景

スウェーデンでは、全般的に博物館の存在が大きく、人々の博物館に対する関心は非常に高い。博物館に足を運ぶことは、市民のレクリエーションの一部として定着している。文化の享受に対し、彼らは非常に熱心である。展示替えが行われるたびに何度でも来館し、また各企画への参加も積極的である。誤解を恐れずに言えば、他の娯楽があまり多くないのも、その一因であるかもしれない。いずれにせよ、入館者が多ければ、館側としても張合いがある。様々な企画を考え、サービス向上の意欲が高まり、広告にも熱心になるであろう。即ち、よい意味での相乗作用がある。

そこには、高度の社会保障と福祉・年金制度の充実・教育を受ける機会の均等・平等の観念といった、スウェーデン特有の社会的背景が存在する。老若男女を問わず、障害のあるなしに拘らず、あらゆる人々が社会に参加できるよう、意が払われている。そして成人教育・生涯教育が大変盛んで、その体制も整っている。

そうしたなかでは、社会において博物館が果たす役割も、自ずから明確にされるであろう。社会教育機関として、社会に密着し、人々の活発な社会参加と学習意欲に応えなければならない。常に市民との接点を求め、市民に対する貢献を視野に入れることが要求されよう。そし

て、市民に支えられることにより、博物館自体が成長していく結果となるのである。

おわりに

以上、スウェーデンの東方博物館を紹介し、その特徴を論じてきた。もちろん同館にも、不備な点や改善すべき点があるに違いない。筆者はここで、最高の博物館のサンプルとして、同館を採り上げたわけでは決してない。ここに紹介した事例は、教育普及活動にしろ宣伝活動にしろ、1つ1つを見れば、日本の各博物館においても行われていることである。また、さらに工夫がこらされた活動例を、他にいくつもあげることができよう。

しかしこの東方博物館は、見てきたとおり、非常に合理的なシステムを持つ。そしてそれが有効に機能し、研究機関としても社会教育施設としても、円滑な運営がなされている。社会に根付いた博物館として、そこに一種の理想像を見出すことができるのではないだろうか。社会的背景や行政のバックアップも踏まえた上で、それが日本における今後の博物館像を考えていく参考となれば、幸いである。

なお、スウェーデンにおける博物館活動には他にも様々な事例が存在し、大変興味深いものがある。またそれらの基調となる同国の文化政策についても、詳しい考察が必要である。本稿で言及しきれなかった点については、さらに別稿で論じることとしたい。

注

- 1) 所在地 Tyghusplan, Skeppsholmen
Box 16381, S-103 27 Stockholm
- 2) 1988年9月12日, 1989年1月2日。インタビューは全て英語で行っている。従って、スウェーデン語が英訳され、それを本稿でさらに和訳することになるため、若干のニュアンスの差が出る可能性があることを、あらかじめ御了解頂きたい。
- 3) スウェーデン語の発音のカナ表記は、もともと非常に困難である。本稿では最終的に、スウェーデン大使館広報部の御教示に従った。また同広報部によれば、館の名称などの固有名詞については、日本語の定訳は付けていないということである。

なおここで、当館を「東方博物館」と訳した根拠を述べておく。スウェーデン館の 'Östasiatiska' は、直

訳すれば「東アジア」である。しかし当館が現在所蔵する資料は、日本語に言う狭義の「東アジア」に含まれない地域までも対象としている。従って語義的には、ウラル山脈・カスピ海・黒海・地中海・紅海を結ぶ線以東のアジア諸国の総称である「東洋」(『日本国語大辞典』小学館, 東京)が妥当であると思われる。これは即ち、「西洋」に対する、文化圏としての「東洋」である。スウェーデンを含むヨーロッパでは、それは 'the East' であり、さらに中国・日本を 'the Far East' と呼んでいる。

ところでレイヨン氏の中国語名刺には、「瑞典東方博物館」とある。現代中国語における「東洋」は、日本語のそれとは意味が異なり、中国の東、即ち日本をさす。日本語の「東洋」にあたるのは、中国語では「東方」である。一方日本語でも「東洋」とほぼ同意味で「東方」が使われている。『日本国語大辞典』によれば、「東方」という語にも、ヨーロッパの東の方の国、またヨーロッパから見て東に位置する国々、バルカン半島の諸国・アジアの諸国・日本などをさすという意味がある。マルコ・ポーロの旅行記が『東方見聞録』と邦訳されている例もある。そこでここでは、スウェーデンで使われている「東方博物館」という中国語名称を活かして、邦訳としても「東方」という語を採用したい。

次に 'Museet' について、「美術館」と訳すか「博物館」と訳すか。当館は本文に述べるとおり、「国立美術館群」に属し、美術品を扱う館と認識されている。しかし実際の館蔵資料は美術品のみに限られない。また英語名称の 'Antiquities' の意味を重視して考えると、やはり国立美術館・近代美術館とは異なり、「博物館」と訳すべきである。

以上により、当館を「東方博物館」と邦訳することとする。

- 4) SFS 1988:677, "Förordning med instruktion för statens konstmuseer." Jun. 1988.
- 5) 所在地 S. Blasieholmshamnen
Box 16176, S-103 24 Stockholm
- 6) 所在地 Skeppsholmen
Box 16382, S-103 27 Stockholm
- 7) 文部省

「国立美術館群」		
国立美術館	近代美術館	東方博物館

予算は「国立美術館群」に対して年間約2500万SEK

与えられる。そこから敷地代や職員の給料、諸経費や書籍費を賄い、また新規資料購入のために、東方博物館として約10万SEKが割り当てられるという。もちろんレイオン氏にとっては、「少ない」数字である。ただし金銭的には、友の会からの援助がある。

8) Bo Gyllensvärd, "Historical Introduction."

Arts of Asia, Östasiatiska Museet, Stockholm, Nov.-Dec. 1981.

本文は英文であるため、固有名詞についても英語名称しか判明しない。筆者のユーレンスバードは当時の東方博物館館長であったが、1981年に退官した。替ってヴィルギーン Jan Wirgin が館長に就任し、現在に至っている。

9) the Museum of Far Eastern Antiquitiesはこの時に発足したのであるが、当時は中国の資料がほとんどであったので、これはまさに直訳通りの「東アジア博物館」と言えるものである。従って現在の東方博物館と区別するため、本文中では、便宜上「東方博物館」と括弧を付けて記すことにする。

10) 角田文衛編『世界各国史 VI 北欧史』山川出版社、東京、1955年、237頁。

11) *Östasiatiska Museet och Föreningen Östasiatiska Museets Vänner 1985-1986*, Östasiatiska Museet, Stockholm, 1988.

なお同報告書の1987-1988年版は、現在編集中心により参照できなかった。

12) 博物館の職名の各国語対訳は、日本ではまだ確立されていない。従ってここで安易に邦訳することは憚られる。特に「インテンドント」と「コンセルヴァトゥール」は、日本の職名で完全に表現することができない。そこで現地読みのカナで表記しておく。その他については、職務内容が理解できるよう直訳して括弧内に記しておく。

13) 主任インテンドントは副館長を兼ねる。

14) スウェーデンにおける大学のカリキュラムや、博物館とインテンドントについては、 Upsala 大学民族学研究所研究員スヴァンベリ Ingvar Svanberg 氏の御教示を得た。

15) なお、これには検討を要する点が若干見られた。例えば、年表上で、奈良・平安・鎌倉という時代区分の中に「藤原時代」という名称が加えられていたのは、いかがなものであろうか。

16) 1980年9月-11月「日本の刀剣と工芸品 Japanska svärd och konsthantverk」

1985年3月23日-7月28日「着物と帯、近代日本の織物展 Kimono och obi. Modern japansk textilkonst」

1985年6月5日-7月28日「日本の陶器傑作展 Keramiska mästerverk från Japan」

1986年2月8日-4月13日「日本の刺青展 Japansk tatueringskonst」

1989年6月4日-「自然との対話 Dialog med naturen」

17) インタビューの際、レイオン氏は「常設展 permanent exhibition」に対するものとして、'temporary exhibition', 'special exhibition' の語句を併用された。これは、それぞれ「企画展」「特別展」と区別して訳すべきかもしれない。また館蔵資料のみで構成するか、借用資料を中心にするかの違いもあろう。氏がどのようにその2つを区別されていたかは不明であり、スウェーデン語の表現も未確認であるため、ここでは「常設でない」展示を「特別展」として表すに留まった。

またレイオン氏はしばしば 'small exhibition' という語も使用されたが、これも同様に扱った。

18) 「草書体による中国の書道と古典詩 Kinesisk kalligrafi med kursiv skrift och kinesisk klassisk poesi med kursiv skrift」

春・秋期コース：毎週火曜日18:30、水曜日13:00
10週間計20回、参加費 500SEK

夏期コース：土・日曜日を除く、連続15日間計15回

19) スウェーデンは長い成人教育の伝統を持つ。非形式的な民衆教育としては、国民高等学校・公開講座・学習サークル・通信学校などがあげられる。1970年代には就学前教育の提供・成人教育のための施設拡張・学習サークル運動の奨励が行われ、いかなる年齢も障害も関係なく、男女平等に、社会のあらゆる人々に教育を受ける機会を与えようとする姿勢が強調されている。学習サークルは1902年より始まり、任意教育諸団体の地方支部が成人のために組織している。典型的なスカンジナビアの成人教育形態として、参加者数が断然多く、「北欧の現象」とも言われる(レオン・パウチャー著、中嶋博訳『スウェーデンの教育 伝統と変革』学文社、東京、1985年、171頁)。

1986年には、学習サークル数は約31万、参加者は約261万人を数える。ちなみにスウェーデンの全人口は約840万人(そのうち成人は約500万人)である。また、美術(芸術)と公民(社会)の二分野に関するものが学習サークルの総時間数の約2/3を占める。

国庫助成金を受けるサークル資格は、参加者が5～20名、学習のために最低5回は集まり、期間が4週間以上続くものでなければならない。国庫助成金は、時間単位で一定額が支給され、サークル経費の約40%をカバーしている(スウェーデン大使館広報部ファクト・シート「スウェーデンの成人教育」1988)。

20) 「日本—伝統的な生活 Japan — levande tradition」参加費350SEK, 2～4月中の計6回, それぞれ18:30より。これについては、東方博物館との協力のもとに、日本の芸術と文化を学ぶことを目的とするという説明がなされている。内容は以下のとおりである。

2/22(水) 歴史探訪 En historisk överblick

3/8(水) 茶道と庭園 Tecermonier och trädgårdar

3/15(水) 歌舞伎と能 Kabuki och noh-teater

4/5(水) 日本の絵画と彫刻 Japanskt måleri och skulptur

4/12(水) 陶器・漆器と極少彫刻 Keramik, lack och miniatyrskulptur

4/18(火) 東方博物館への訪問学習 Studiebesök på Östasiatiska museet

21) 美術品鑑定希望の来館者数は、1985年 336人、1986年 316人。また1988年には約430人が訪れたという。

22) 入館者数

	1985年	1986年
1月	54451人	3662人
2	38957(※1)	7682
3	3358	6078
4	4105	5427
5	2942(※2)	6157
6	9144	5192
7	10972	7104
8	4683	7111
9	4012	6030
10	5246	5994
11	5962	8832
12	3844	7584
計	147676	76853人

※1 2/18-3/11閉館

※2 5/11-5/19労働争議により閉館

23) 例えば日本の場合、1987年度の博物館1館当り年平均入館者数は、総合12514人、郷土14454人、美術96271人、歴史70200人、自然史71865人、理工152004人である(『博物館研究』Vol.24 No.3, 財団法人日本博物館協会, 東京, 1989年3月)。

24) 東方博物館展示カタログ *Östasiatiska Museets utställningskatalog* は、常設展・特別展ともに通し番号で、1986年現在第44号まで発行。

25) シリーンから寄贈された「シリーン文書 Sirenarkivet」など。

26) 図書館利用者数は、1985年約350人、1986年約390人。

Acknowledgements

The author would like to express great thanks to Mr. Per-Olow Reijon, a curator of the Museum of Far Eastern Antiquities, for his heartfelt cooperation. Also the author would sincerely thank following people, who gave useful advice for preparing this paper: Mr. Ingvar Svanberg, Centre for Multiethnic, Uppsala Univ., Dr. Hiroshi Okuda, Royal Institute of Technology, Stockholm, Press and Information Section, Embassy of Sweden, Tokyo, Prof. Gô Ogawa and Associate Prof. Mitsuyuki Takano, Ochanomizu Univ., Tokyo, and professors at Kawamura Gakuen Woman's Univ., Chiba.

The copyright of all photos in this paper belongs to the Museum of Far Eastern Antiquities, Stockholm, Sweden. The author would record here my warmest acknowledgements to this museum for the permission of reprinting.

謝辞

本稿作成にあたり、多忙な時間をさいて個人インタビューに応じ、かつ多数の資料を提供して下さった、東方博物館副館長・インテントであるレイヨン氏には、心から感謝申し上げる次第です。

また、スウェーデンの博物館に関して御教示下さったウプサラ大学民族学研究所のスヴェンベリ氏、英語及びスウェーデン語について御援助を頂いた、当時スウェーデン王立工科大学留学中の奥田洋司氏、スウェーデン大使館広報部、そして数々の有益な御助言を下された、お茶の水女子大学教育学科小川剛教授、鷹野光行助教授、勤務先である川村学園女子大学史学科教官の皆様方に、記して御礼申し上げます。

なお本稿に引用した写真は、全て東方博物館から提供されたものであり、著作権は同館に属することをここに明記し、掲載の許可に対し感謝致します。(1990.1.25)